

2004 年 12 月 5 日 於東京外語大本郷サテライト

「国境なき医師団の活動について」

寺田 朗子

(若かりし日の思い出)

嘗て私がクローバーに入っていた頃は、小出さんは一年先輩の姉御でした。楽譜を持って小さな声で歌っていた私を多分ご記憶だと思います。気が小さくてこんなふうには人様の前でおしゃべりをするなど、うそのようなクローバーの一員でした。私はまずはクローバーに 2 年間皆様とご一緒にいて、今もよく覚えている「白いバラ」で育ちました。3 年の夏、フランスに 1 年留学、そのあとクローバーの変遷があり、コールユーベルという名前のクラブの頃にお別れしました。でも、やっぱり一番最初の、若かりし日の思い出のクローバーが一番大きい存在です。

私が 3 年生でフランスに留学、次の年帰国し、当時の学園紛争の波に乗って外語大はロックアウト。授業がなくなりました。でもクラブに歌だけは歌いに行っていました。でも、下手に仲間に会うと、いわゆるスト派への説得が強烈だった。だからあまり練習に行きたくなくなって、だんだん足が遠のきました。こうした先の見通しのない日々の中に、結婚をしてしまい、子供を二人生んだあとで卒業をしました。結局 10 年間月謝を払い続けましたけど、決して決して勉強が好きだった訳ではないことだけ、そこで沢山勉強したから、今なにか出来ているということではないことだけは、申し上げておきたいと思います。

今日お話しをする国境なき医師団は、その頃にフランスで起こっていた社会運動に端を発し、始まった活動だったとあとで知りました。

(会長としての私の仕事)

今私がしているのは、国境なき医師団の会長という、立場は偉そうに見えるのですが、実質は会社の会長さんみたいなもので、社長さんは事務局長で、実際の運営を取り仕切っています。その人はフランス人なのですが、国境なき医師団の世界各地の事務局と常にコンタクトを取りながら、医師などを送り出すことをしています。私は週数回事務所に行き、日本の中での団体としての立場に関することを考えたり、例えばヨーロッパなどの支部との定款の兼ね合いを考えながら、日本でのもろもろ規則をまとめたり、寄付のお願いに出かけたりしています。今は定款の一部改訂があるので、毎日文字を見つめて暮らしています。また、日本国内の多くの方々に、テレビなどで知る厳しい状況の国々の単なるニュースでなく、MSF の活動を通して知る多くのことを皆様にお話することを一生懸命やっています。自分で関わっていてすごく思うのですけれど、一番大事なことで、それは「知ること」なのです。「人の苦しみは、それを見た者に義務を負わせる」というフランスの哲学者の言葉がありますが、「見て」「知って」しまったら、「何かしなければいけない」のではないかと、という思いに駆られます。ただ、私は医者でもないし、看護師でも栄養士でもないから、せめて私の立場で知ったことを誰かに話すこと、これが一番大きな役目かなと思って、毎日過ごしています。

(国境なき医師団の生い立ち)

メドゥサン サン フロンティエ (Medecins sans frontiers=Doctor without borders)の頭文字をとって、

MSF と呼ばれています。今から 33 年前、1971 年 12 月にフランスで生まれました。

誰が立ち上げたかの説明をしますと、ちょうど私がフランスにいた 1968 年の 5 月に、日本の大学紛争の前身というかお手本のようなものなのですけど、学生たちが従来の価値基準に疑問を持ち始めましたことから、いわゆる 5 月革命といわれるものが始まりました。さまざまな事柄に対し、これまでの見方でいいのか、もっと違った見方がないのかといろいろ悩んだのです。日本でのこの流れの展開上には寮費の値上げとか色々あったのを記憶していますが、フランスでのスタートはこうしたものでした。その時、若い医師とか、医学生が、医師は白い服を着て病院で患者を待っているだけでいいのか、もっと医師として出来る仕事があるのではないかと考えたりしていたそうです。

ちょうどその人たちの数人が、1969 年ナイジェリアのビヤフラであったひどい飢饉、飢餓に国際赤十字から依頼を受け、医療援助に行きました。国際赤十字というのは戦争の時でも何処の国へも入れるし、身の安全を守って貰えるけれど、「現地で見たことは一切しゃべらない」という中立の基本姿勢で、その約束に署名をして現地入りします。フランス人の医師数名も現地に行きましたが、実際にアフリカのビヤフラの地で見たものは・・・何かが違う。一つの民族が意図的に飢餓の状態に追いやられて滅ぼされて行くのに近い情態でした。これは自分たちが黙って医療だけをしていていいのだろうか、とすごく悩んだのです。然し署名をしている以上、とにかく医療だけをして、帰国。それから「ビヤフラの虐殺に抗議する会」というものを立ち上げました。これは「本当は一つの民族を滅ぼす、生きて行く権利が損なわれている人たちがいるという問題ではないのか」と問題提起をしました。

1970 年、今度はバングラデシュで大洪水があり、「心ある医師よ、援助に行こう」との呼びかけがあり、数名の医師が出かけました。ところが、当時のバングラデシュは国の制度が整っていないくて、入国自体も移動や手続きも大変でした。かなり時間がかかってたどり着いた現地では、医者がテントなどの用意をするのでは余りにもロスが多い。その上、背負っていかれる荷物は僅かだから、出来ることも僅かで、こんな思いをして行ったのにどうしてこれだけしか出来ないのかとジレンマを抱いて帰国しました。

そして帰国した後、この両者を結びつける人たちがいて、「もっと効率よく、みんなの思いと力を合わせて、ぱっと動けるグループを作ろう」ということになり、国境なき医師団という緊急医療援助団体を立ち上げました

自分たちが現地に出かけて行き、実際に見てきたことを世の中に伝えて、そのことで辛い人たちが少しでも助かることのプラスになるのなら、赤十字とは立場の違う「証言活動」を大切にするかたちで行こうということを決めました。そして、自分たちの活動の資金は、篤志家の寄付を募り、それを無駄なく効率よく使う、という形でスタートしました。

（発展の経過と沿革）

翌年、ニカラガで地震がありました。医療チームを 3 つ、外科医を 3 人、10 トンの物資をこれまでの記録にない速さで現地に送りました。動きの速い団体が出来たとヨーロッパで知られるようになりました。

初めのうちは資金が不足。医師仲間に頼んで資金を集め、それをプールして、洪水や自然災害など必要と思われるところに出かけていきました。ホンジュラスの洪水の時には、先ず緊急の援助をしたあと、この地域には医療が無いではないか、医師がいらないではないか、このまま自分たちが帰ったら、あとどうなるか、ということで、長期の医療技術援助をすることになり、こうした形の援助の必要性にも気がつきました。

レバノンの内戦地域に行き、「弾の飛び交う下で医療をしている医師がいる」と新聞に書かれて、名前を上げました。カンボジアでポルポト政権に追われて多くの難民が出た時には、（後にはその数は何十万人にもなりますが、当時は 8 千人位ということでした）、非常に緊張して 100 人位のボランティアを集め、タイ国境で難民キャンプを提供しました。

こうした活動の経験のなかから、自分たちがすることは何が一番いいのか、自分たちしか出来ないことは何なのか、自分たちのスタイルを作り上げて行きました。

こうして 30 年、その間には仲間内の主張の違いや活動の方針で意見が分かれて、「世界の医師たち」というグループと分かれてしまいました。「世界の医師たち」は今も活動していますが、実はその時「国境なき医師団」に残った人の方が少なかった。これについて、自分たちは間違っていないはずなのに、ということかと、それまでの活動の方法などを検証しました。まずは現地に行ってもらう人たちの本国の住居の手当てとして、当時のパリの家賃の月 7 万円前後を支払うことにしました。医者給料としては少ないけれど、少なくとも自分の住む部屋だけは確保できているということです。この生活の基本の安定でボランティアの登録者が大変増えたそうです。

活動のシステムとしても、医師や看護師は専門化であるから、その能力は専門域で存分に使って欲しい。雑務は医療が専門でない人でもできる、ということで、これらの仕事をこなす者としてロジスティシャンという職掌をきちんと確立し、仕事をより能率的に行なうようにしました。

寄付の集め方も考えました。のちに一日 1 フランキャンペーンというのを初め、活動資金も安定したものになりました。このように一旦落ち込んだものを乗り越えて組織がまた大きくなったのです。

（世界中に拡がる組織）

当初はフランスから医師団を送り出していたが、隣国のオランダ、ベルギー、ルクセンブルグなどから活動に参加する人も増え、だんだんと各国に支部が増え、最終的には 18 の国に支部が出来ました。18 の国のうち、13 がヨーロッパ、あとの 5 つはアメリカ、カナダ、オーストラリア、香港、日本です。そのなかでも歴史の古い 5 ヶ国フランス、オランダ、ベルギー、スイス、スペインは、派遣チームを送り出すことが出来ました。しかし日本など、彼らから見ればまだ若い組織は、まだその仲間には入れてもらえず、境的にはこのような形でバランスをとって仕事をして来ました。

日本での収入は 16 億円近く、でも世界中で集められるほぼ 480 億円の数%で、日本の貢献度はまだ小さいのですが、それでもアジアの拠点として何かをしたいとの思いが増えてきました。

このような環境の中で、フランスやオランダが、チーム派遣を行なうオペレーション部門の仕事を他の国に分けていくことを始めました。フランスには派遣に係わるオペレーション部署のなかにデスクというのが 8 つあって、一つのデスクは大体 4 カ国を担当しています。対象国の状況を全部把握していて、派遣の内容を決めていますが、その 8 つのデスクの一つを日本の事務所のなかに置いてくれました。フランスから責任者が来て、その下で日本人が仕事をしています。今日本が担当しているのは、ミャンマーとケニヤで、そのほかに国内プロジェクトを少しやっています。そのデスクが始まって以後、私たちと現地との距離がすごく近くなりました。それまで、毎年 12～13 人、多い時で 17 人位しか派遣者が送り出せなかったのですが、去年は 33 人になり、今年はもうすぐ 50 人になります。私たちにとって、デスクが日本に置かれたことはすごく大きなことでした。

日本から人を送り出す時はどうするかというと、派遣を希望する医師や看護師に説明会を開き、現地の状況や条件、仕事の内容などを話します。また、登録できるための条件として、一つは語学で、医師団では 3000 人近いボランティアがほぼ 80 の国で、40 数カ国籍の人たちが働いていますか

ら、英語かフランス語で仕事ができること。それから、それぞれの職種でのキャリアが 2 年以上あること、特に外科医は自分一人で手術ができる認定外科医の資格が必要です。もう一つは、仕事に行く期間が基本半年なので、半年職場を休めること、ここが日本では一番引くかかるところです。特別に外科医に関してだけは、厳しい状況のところに派遣される場合、1 ヶ月か 2 ヶ月の仕事もあります。あるスリランカへ派遣された医師は、1 日 15 回も 20 回も手術があつて、それは厳しかったと言っていました。このような条件をクリアした方に登録していただき、フランスなどに連絡を入れます。求められた条件にあった人がその中にいて派遣が決まると、出発前にフランスなどに寄り、必ずレクチャーを受けることになります。今は日本が担当している国に関しては、日本でもレクチャーができるようになり、逆にフランスからもそれらの国への出発前にレクチャーを受けに来ることもあり、色々な意味で、日本の組織としては経験を積んで、仕事内容に厚みを得てゆくための大事な場所として、デスクがあると思います。

（危険を冒し、沢山の人たちが支える活動）

派遣される人は、医師（外科医、内科医、小児科医など）、看護師、助産士、検査技師、麻酔医、心理療法士等です。

最近では、心理療法を扱う精神科医は役割が大きくなっています。目の前で家族がなぶり殺しになった家族の心のケアは大変と聞いています。日本から派遣された専門家は、母親が残された子供を抱くことができなくなっていたのを、半年ほど母親の話を聞いて聞いて、中にしまいこんでいるものを外に出させて、最後は子供を抱けるようになったとの例があましました。いかに心理療法が重要かわかります。栄養失調のひどい地域では栄養士の活躍も大きいですね。

さらに、ロジスティシャンと呼ばれる人たちが医師団の活動には大きな役割を果たしています。この仕事の話の話を少しさせてください。

物を管理することから始まってあらゆる雑務を引き受けている「なんでも屋」といわれる縁の下の人たちです。非常に大切な人たちです。必要な資材や薬品の搬送や手配と配布の確認（中にはお金のために売ってしまう人もいて、本当に必要な人を見極めます）、安全情報の収集、運転士の手配、時として百を越すトイレの穴掘りや確保、ワクチンの用意、きれいな水、といっても菌がなくて病気になるレベルの水の用意（そのために塩素でどのように消毒するとか、きちんと教育を受けています）、安全情報のための無線機は命綱になるので、その手配と修理、それから車の修理が出来ること。蛇足ですが、車が一番多く使われているのがトヨタのランドクルーザーで、一つの車種にすれば、部品の調達に便利でマニュアルが一つで済むからです。また東芝のパソコンが現地では喜ばれていると聞きました。ともに日本製で嬉しいですね。ロジスティシャンはまた、地元の安全情報を得るためにゲリラのボスと会って、自分たちの仕事を説明して安全の保障を取り付けたり、地元の行政関係に行って話をしたり、時としてはゲリラのボスと杯をかわしたり、色々な方法を使って、安全に仕事ができるようにしています。そして、私たちはどちらの味方でもなくて、武器を持ってなければ、誰でも治療しますということを知らせています。

こうして安全に働けるように取り組んでいても、悲しいことに襲われることがあるのです。アフガニスタンで一つのチームが車で仕事に出て行きました。15 分経って何の連絡も無い。近くの二ヶ所のテントから見に行ったら、医師団の車は、前後から撃たれ、横から手榴弾を投げられ、中に乗っていた人は医師たち 3 人と地元の運転手と通訳 5 人が亡くなっていました。援助を待っている人がいても、行く人の命が保障されないと・・・断腸の思いで、ソ連の侵攻の頃からずっと仕事を続け、タリバ

ン時代も現地スタッフで仕事を継続してきたアフガニスタンでしたが撤退しました。現在もアフガニスタン国境近くでいつでも入国できるように待機しています。イラクでも同じように撤退をしていますので、非常なジレンマに陥っています。

元に戻りまして、ロジスティシャンは、チームの活動の基本を支える人たちです。さまざまな工夫と知恵、たいしたものと思います。アフガニスタンで 1990 年、医師団が無断で国境の裏山を越えて活動をしていましたが、ある地域でワクチンがどうしても必要になりました。ワクチンは4℃でなければだめになる、それをどうやって運ぶかを考えよと指示が出ました。昼間はいかかん照り、陰しい山、無断で入りこんでいるからヘリコプターも飛ばせない、車も通れない、人が背負うことは無理。そこでロジスティシャンが知恵をしぼって最後に思いついたのは、地元の人が山を越えるのに使っているロバ。これを3頭用意し、1頭目の背中に太陽発電機、2頭目の背中にバッテリー、3頭目の背中に冷蔵庫を積んで、ハイテクと一番基本のロバを利用という工夫をして無事に求められていたワクチンを求めていた人たちの手元に運ぶことが出来ました。

このように国境なき医師団は医師だけで動いているのではないことを知っていただき、「自分も何かしたい」と思う方に参加していただきたいと思っています。余談ですが、今日本に来ているフランス人のロジスティックの責任者は「僕は機械いじりが好きで、人の行かない国へ行ってみたかった」と思い国境なき医師団に参加したそうですが、仕事の重さに虜になってそのままずっと仕事を続け、今最高責任者になりました。今回日本に来て、かわいいお嬢さんと仲良くなり彼女を奥さんにしてしまいました。

医師以外には他にも、現地の活動の運営をして行くアドミニストレーター、経理専門家等もいて、さらに地元のナショナルスタッフと、仲間としてどう仕事をして行くかが重要になっています。通訳の出来る地元の人で英語が話せる人、道が分かっている運転手さん(特にカンボジアでは地雷があるので)、事務所の警備をするガードマン、みなのお食事を用意する料理人等、色んな人たちが働いていて、各国に派遣されている人が全体で 3000 人くらいに対し、ナショナルスタッフが 18000 人から 20000 人働いています。この地元スタッフが、タリバン政権下のアフガニスタンのケースのように、派遣者不在の間も地元の人たちだけで仕事出来るほどに仲間としての絆を深めたいというのが、私たちの今の願いです。

これら全部を含めて、自分たちは「国境なき医師団」という思いを持って、天災、人災、戦争など、あらゆる災害に苦しむ人に、人種、宗教、思想、政治すべてを超えて、差別無く援助を提供するという理念を掲げて、苦しむ人のいる地域で仕事をしています。

(医師団との私のかかわり)

日本に事務所が出来たのは 1992 年でした。なんで私がここに関わったかという、これが外語のおかげなのです。

外語同窓会の会報の手伝いをしていた頃、インド語のある会社の社長をしてた方が、日本に事務所を作りたいとしていた国境なき医師団に、事務所スペースを提供することになりました。末の娘がまだ高校に行っていた頃でしょうか、ある日その方から電話が突然かかってきました。最初はしびっていたのですが、とにかく来てくれということで、フランスから来た人に会いました。「この団体は皆さんから頂いた大切な寄付を自分たちの手で現地に運んで行くから、どこへ行ったかわからないような使い方はしない」と言われたのが心に残りました。

資料を訳すように頼まれ、「1 月 5 日に持って来て、そしたらニュースレターの第一号が出来るか

ら」と言われて断れず、暮とお正月に大変な思いをして、先ほどの「天才、人災、戦争などあらゆる災害に苦しむ人に…」などの預かった資料の翻訳をしました。これがそもそものきっかけで国境なき医師団に足を一步踏み入れてしまいました。本当に外語のおかげで、私の知らなかった世界を知る機会を頂けたことに感謝しています。

それでも余り深入りしないでお手伝いをしていました。ある時、他の人が訳したニュースレターに載せる記事が置いてありました。一部もらい、帰りの電車の中で読んだ時、涙がこぼれてどうしようもなっていました。これを読んだショックが、国境なき医師団に深くかかわってしまったきっかけでした。これに書いてあったのは、カンボジアの話で、洪水があった地域に月1回の巡回医療で回診をしていたある医師の手記でした。くく 或る村に行った時、6歳位の少女が大きなスカートを肩からかけてお母さんとおばあさんと一緒に順番を待っていた。どうしたのと声をかけるとスカートを取るのを嫌がっていた。でもお母さんたちに説得されてそれをはずした。おなかの前にビニールの袋がぶら下がっていた。そこを見たその医師は言葉を無くした。その袋の中にはその少女の腸が入っていたのだ。少女は2歳の時に腸の異常から開腹手術をして、それがうまくいったらきちんと閉じる手術をもう1回する約束だった。ところが再手術の時になり、お金がないということで手術をして貰えなかった。そのうちにだんだんと傷が開いて、腸がはみ出てきてしまった。お母さんは思い余って、ビニールの袋を綺麗に洗って腸を収め、背中から吊るようにして、その子は4年間過ごしてきたという。医師は『今日は何も出来ないけれど、必ず連絡するから待っているように』と言ってプノンペンに戻った。そしてフランスから医師を呼び、麻酔医も呼んで、プノンペンの病院で準備を整えて、その少女を呼び寄せて手術をした。手術は難しかったが、無事に終わることが出来た。三週間病院にいて、少女は村へ帰った。それからまた巡回医療で、医師がその村を回った時、その少女が笑顔で過ごしているのを見て、ああ国境なき医師団で仕事をして良かったなあ、と思った。くく こういう話の載っているものだったのです。私も3人の子供の母親ですので、その少女も辛かったろうと思う一方、親がどんな気持ちでいたのだらうと思うと、どうしようもない気持ちになりました。

日頃私たちが「医療がない」とか「薬がない」とか聞いても、あまり深く思わないでその言葉そのままにしか受け取らないものが、実はその裏に私たちが全然想像つかないものがあることを強く感じました。最初にお話した言葉「人の苦しみを知るものは、義務を負う」、この言葉のように、私にできることを何かしなければいけないと思い、この活動に深く関わるようになりました。

そして日本の国境なき医師団が単なる事務所から組織を整え、理事会を作り新生なった時、外語の卒業生で、当時インド・スエズ銀行の責任者をされていた渡辺さんが1年間、初代会長をしてくださいましたが、ご多忙なため、一番古いボランティアだった私に依頼があり、暫くの間と思って会長役を引き受けました。ところが、1999年、ノーベル平和賞を頂くことになったのは計算違いで、会長として取材やインタビューを受け、講演を頼まれるようになってしまいました。結局はこの立場をいただいたことに感謝をするしかないと思って、一つの新しい人生をそれなりに進むことにしました。

その後、日本の国境なき医師団は順調に育っています。特にノーベル平和賞をいただいてから知名度も上がり、皆さんに沢山の真剣なご寄付をいただいて、私たちはますます思いを新たにしなければいけないと思っています。

（勇気を与え、心と心をつなぐ キガリの女性の言葉）

ノーベル平和賞の授賞式は素晴らしいものでした。その中でスピーチの一部が、私にとって忘れられないものですので、今日もそれをお話したいと思います。スピーチをした人は、医師団のカナダ人

医師で、ルワンダ内戦の時、首都のキガリで医療活動をしていた人です。彼のいた病院では、170人いた入院患者が全部ひきずり出されて殺された。そういう状況で仕事をした人です。

「当時、私はキガリのチームの責任者でした。そこで働いていた人々の勇気を、言葉で言い表すことは出来ません。そこで死んだ人の恐怖を、言葉で言い表すことは出来ません。そして、私や医師団のメンバーが、ずっと心に抱き続けている恐怖を、言葉で言い表すことは出来ません。私は、キガリで一人の患者の言った言葉、『ウメラ ウメラッシャ』という言葉、忘れることが出来ません。これは、ルワンダの言い方で、大ざっぱに訳すと『しっかり、しっかり、友よ、頑張って、勇気を奮い起こして』という意味になります。キガリの病院で、なたで襲われたばかりか、全身意図的に切断された一人の女性が言った言葉です。彼女の耳は切り落とされていました。顔は念入りに傷つけられていたので、傷の中に、顔の組織がはっきりと見えるほどでした。その日は、何百人という女、子供、男が病院に運びこまれ、余りの数の多さに、路上に寝かせるしかありませんでした。多くの場合私たちは、その時、その場で手術をして、病院のまわりの溝は、文字通り真っ赤な血が流れていました。彼女はそうした大勢の一人で、非人間的な筆舌に尽くしがたい苦しみの中にいました。私たちがその時、彼女にして上げられることは僅かに、必要とされる縫合、そして出血を止めること、それくらいのことでした。私たちが疲労困ぱいしており、外にも沢山の患者がいることを、彼女は知っていました。彼女も私も分かっていました。その時、彼女は私を、この逃れられない地獄の状況から救ってくれました。私がそれまで聞いたこともないような澄んだ声で、彼女は私に言いました。『さあ ウメラ ウメラッシャ 頑張って 勇気を奮い起こして』と」

結局、この女性は、そのまま亡くなって行きました。このお医者さんは、この一人の女性の命を救うことが出来なかった。だけど、彼女は亡くなったけれど、その彼女がこのお医者さんに、ものすごい力をくれたのです。そのお医者さんに実際に会って話をした時に、彼が言っていました。「もし彼女が自分に声をかけてくれなかったら、自分は医者なんかもうやっていられなかっただろう。今国境なき医師団にいることも有り得ないことだった」人間というのは、最後の最後まですごいことが出来るなと強く思います。

私たち国境なき医師団は、平和賞を受けていますが、平和をつくる団体ではないのです。平和を作ること、これは大きな力でなければできません。私たちに出来ることは、平和のかけで苦しんでいる人たち、或いは失敗のうらで泣いている人たちに対して、一つでも彼らの苦しみを減らすこと、命を助けること、それしか出来ないのです。でも、これこそが国境なき医師団に出来ることだと思っています。

今も 3000 人近いボランティアが多くの地域で、様々な思いを抱きながら仕事をしています。「そばにいる人に手を差し出すこと」、これが私たちの活動の原点です。この行為のつながりが世界中に広がって、いつの日か国境なき医師団の仕事がなくなるその日を私たちは夢見ています。その日を心から願いながら、私も私の出来ることとして、今日はお話をさせていただきました。女性の目から見た話で、あまり論理だったものでなかったかとも思いますが、聞いていただいてありがとうございました。